

大学院生に対する諸々の段階でのより適切な対応に向けて

0 . 背景・現状

「現代日本語学講座」では、これまで優秀な大学院生に恵まれ、博士学位の取得、大学などの研究・教育機関への就職についてもある程度の実績をあげてきた。しかし、近年、競合する他大学大学院も増え、強い危機感を持っている。

今後、優秀な入学者を迎え、大学院生が前期課程・後期課程を通じて十分な研究成果をあげられるように指導・対応し、博士学位を取得できるようにし、大学などの研究・教育機関に就職できるようにするために、何をすべきか。

1 . 入学希望者の開拓

(1) これまでの入学者 (入学希望者)

兼業先 (名古屋 Y W C A、南山大学など) の受講者 / 講演・研究発表などを聞いた者 / 書物・論文などを読んだ者 / 知り合いの大学教員に勧められた者 / 日本語・日本文化研修生として名古屋大学に在籍した者 / ホームページで講座・教員を知った者

(2) 今後の対応

- ・研究活動のより積極的な発信
- ・学位取得の実績、就職の実績などの公開・発信の継続 (ホームページ)
- ・入学希望者へのより親身な対応 (メールのやりとり、面談)
- ・入試問題の工夫 (より適正に能力・適性の判断ができるように)

2 . 前期課程における指導・対応

(1) 授業 (「現代日本語学概論」)

[・大前提 : 年間 30 コマの授業をできる限り有効に活用したい]

- ・問題点 : 受講者の (専門的・知的) 能力、知識、取り組みに大きな差
- ・基本方針 : 能力、知識を有する者、後期課程の院生が得るものがあり、満足する授業
- ・対応 : 能力、知識が十分でない受講者への対応

留学生センター・入門講義 (「 言語学 、 」 「 日本語学 、 」) の実施

授業の前提となる基本文献の提示

早い時期に基本文献の内容が身についているかチェック : テスト・レポート

基本項目の復習・確認

(2) 修士論文

[・大前提：計画的に研究が進められるように、定期的に個人指導]

- ・博士論文を十分に射程に入れた研究対象・研究範囲の設定（修士論文でどこまでやり、博士論文に何を残すか / 修士論文でやりすぎない？）
- ・修士論文をよりよくするための場の提供（研究会での発表 / 指導教員以外の専門家からのコメント）

(3) 院生同士の相互研鑽の奨励

3. 後期課程における指導・対応

[・大前提：計画的に博士論文が進められるように、定期的に個人指導]

(1) 学会発表

- ・学会発表の奨励（研究内容に最適の学会で）

自分と同じ専門分野・研究テーマの研究者との交流、ネットワークの構築

- ・応募原稿（アブストラクト）の指導
- ・学会発表練習の場の提供（研究会）

(2) 学会誌への投稿

- ・研究内容に最適の学会誌への投稿
- ・修正要求への対応（諸々の学会誌の特徴・レベルへの対応）

(3) 就職活動の手助け

[・大前提：博士学位の取得]

- ・推薦書の書き方の工夫
- ・指導教員自身のネットワークの拡大
- ・教歴を問うポストへの対応（研究に支障がない程度に非常勤講師をやることも）
- （ ・博士論文のテーマ以外の論文の執筆 ）

4. その他

- ・優秀な大学院生の存在は、教員の研究の活性化にも大きく貢献する。
- ・大学院での指導・教育は、教員自身の研究と表裏一体を成すものである。